京大広報

No. 683　2012.11

ジュニアキャンパス2012

（左）ゼミ「動物園で動物の心を探る－チンパンジー観察実習－」
（右）若手研究者特別ゼミ「森の水はきれいな水？：森・里・海の水質くらべ」
―関連記事　本文3764ページ―

目次

監事の役割　監事　江島　義道……3758
〈大学の動き〉
英国ブリストル大学と大学間学生交流協定を締結……3761
元総長岡本道雄先生お別れの会を挙行……3762
2012年「中国・西安交通大学 短期留学プログラム」を実施……3763
中学生向けゼミ等体験講座「ジュニアキャンパス2012」を開催……3764
京都大学春秋講義（平成24年度秋季講義）を開催……3765
英国サウサンプトン大学と大学間学生交流協定の調印式を挙行……3765
〈部局の動き〉
生存圏研究所がインドネシアイスラム大学土木工学・計画学部と部局間学術交流協定を締結……3766
先端技術グローバルリーダー養成プログラム第７期生修了式を挙行……3767
グローバル生存学大学院連携プログラム履修者入学式を挙行……3768
〈寸言〉
回想―和魂洋才の勧め―　藤井　公一郎……3769
〈随想〉
「セレンディピティー」　名誉教授　島田　幹夫……3770
〈洛書〉
CiRA（サイラ）と白眉　齊藤　博英……3771
〈話題〉
APRU 大学博物館研究シンポジウムを開催……3772
学術情報メディアセンター創立10周年記念シンポジウムを開催……3773
京都大学防災研究所公開講座を開催……3774
〈訃報〉……3774

京都大学渉外部広報・社会連携推進室
http://www.kyoto-u.ac.jp/

監事の役割

監事　江島　義道

平成24年４月１日に監事に就任し，これまでに，定期監査(平成23年度)，臨時監査(平成24年度)および部局訪問(前期)を行ってきました。この間，多くの方々と話す機会がありましたが，その折，監事の仕事・役割については正確にはご存知ない方もあり，今少し，理解を深めていただいた方がよいと思いました。

そこで，ここでは，監事監査の役割，位置づけ，業務内容および監事監査の現況などについて，改めてご紹介させていただきます。監事の業務について，理解を深めていただき，ご支援とご協力を賜りたいと願っております。

１．京都大学における４種類の監査

京都大学では，「会計検査院検査」，「会計監査人監査」，「監査室監査(内部監査)」，および「監事監査」の４種類の監査を行っています。それぞれは，互いに補完的な役割を担っています。

また，「会計監査人」，「監査室」および「監事」の三者は，大学側の担当理事を交えて，それぞれの監査計画，監査結果等について情報共有と意見交換を行っています。

（１）会計検査院検査

会計検査院が「独立した憲法上の機関として，国や法律で定められた機関の会計を検査し，会計経理が正しく行われるように監督する職責」を担っている立場から，本学の会計などの検査(正確性･合理性･経済性・効率性・有効性)を実施しています。

（２）会計監査人監査

監査法人が，独立の立場で本学の財務諸表(貸借対照表，損益計算書)と決算報告書に関する監査を実施しています。監査には，監事が立ち会うこともあります。

（３）監査室監査（内部監査）

学内に設置されている監査室が，総長の命を受けて業務執行および会計処理等の監査を実施しています。監査目的は，本学の業務運営及び会計処理の適法性等について公正かつ客観的に調査及び検証し監査結果に基づき助言，提言を行うことにより，本学の健全な運営に資することです。

（４）監事監査

監事が，独立の立場で本学の業務全般の執行状況に対して，適法性・妥当性の観点から監査を実施しています。監事監査の具体的な内容は，以下に示します。

２．監事の基本的姿勢と監査の目的

京都大学監事監査規程には，**監事の基本的姿勢**は「①公正不偏な立場で適切に監査を実施することにより，本学の掲げる理念・目的が達成できるように努めなければならない。②監査機能の充実・強化を図るため，積極的に監査に必要な情報の入手に心がけねばならない」と定められ，また，**監査の目的**は「本学の業務について適正かつ効率的な運営に資すること」と定められています。

したがって，監事監査は，上記の京都大学監事監査規程に則って行うことが求められています。

３．監事の立場

監事は，大学運営の意思決定には加わりませんが，大学の重要な業務に関して，業務の実態を正確に把握し，監査し，それに基づく監査結果を公正不偏な立場で総長に報告する責務があります。また必要があると認められる場合は，総長および文部科学

大臣に意見を提出する責務があります。このため，国立大学法人法第12条では，「監事は，総長と同じく文部科学大臣が任命すること」と定められており，総長と監事の間には上下関係はありません。したがって，監事監査は，大学運営の執行部からは独立の立場で実施することが求められています。

4．監事監査の視点

今年の監事監査において特に重要と考えている監査の視点は以下に示す３点です。

（１）トップから現場までの一体的な業務運営

総長サイドから現場サイドまでの業務の流れが一体的に運営されているかについては，特に注視して監事監査を行います。

（２）ステークホルダーを向いた業務運営・業務改善

各部・課等が行っている業務は，最終的には大学におけるステークホルダー（学生，卒業生，教職員，高等学校，企業，地域，社会，国，国際社会等）の満足度を向上させることを目的としています。したがって，効果性，利便性，効率性の向上に向けた業務改善の努力は，これら大学のステークホルダーの期待や要請等に資するものでなければならないと考えます。そこで，各部・課等における業務運営と業務改善努力が，ステークホルダーの満足度の向上にどのように反映されているかに注視して監事監査を行います。

（３）外部への説明責任

外部に向けての監事監査の役割は，監事監査の具体的内容を社会に説明し，大学の社会的説明責任の機能の一端を果たすことです。したがって，監事監査の結果は，コンプライアンスが確保されているかの事項も含め，外部に公表してまいります。外部への説明責任を果たすことは，社会との対話を通して社会の声を咀嚼し，大学が最良の行動を選択し，社会的信頼を維持する道に繋がると考えます。

5．平成24年度監事監査計画（概要）

監事監査は，以下に示す「平成24年度監事監査計画（概要）」（詳細版は京都大学ホームページに掲載URLは http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/profile/operation/audit/documents/kanjikansa_h24.pdf）に基づいて行っています。

５．１　監査の内容

５．１．１　定期監査

（１）業務監査

①大学の運営状況　②人事管理　③財政　④施設・資産管理　⑤学生支援　⑥教育・研究支援　⑦その他大学業務の実施状況

（２）会計監査

①決算（年次および月次）の状況　②資金運用の状況　③資産の管理・活用状況　④人件費・旅費の支給状況　⑤債権の管理の実施状況

５．１．２　臨時監査（重点監査）

（１）監査の主テーマ

「大学の価値向上と社会的責任の推進」

（２）監査項目

①中期計画（大学価値の向上）

②コンプライアンス（大学価値の維持）

③本部と部局の連携

（３）監査対象業務

「教育研究」に関するテーマ

①教養教育の充実への取組：共通教育と専門教育の連関への取組

②競争的資金獲得への取組：競争的資金獲得に対する支援強化への取組

「業務運営」に関するテーマ

①経営資源の活用：経費削減への取組

５．２　監査の対象部局

監事監査規程第５条に定める監査事項に関連する事務本部，医学部附属病院及び附属図書館等について定期監査を実施し，臨時監査は重点事項を所管する本部部門及び部局の業務について行います。

5．3　監査の方法

（1）定期監査

役員会，拡大役員懇談会，経営協議会，教育研究評議会等の主要な会議へオブザーバーとして出席するとともに，書面および担当責任者へのヒアリングによって業務監査を実施します。会計監査は主として会計監査人の監査結果の相当性を判断することによって行います。

（2）臨時監査

書面，担当責任者へのヒアリングおよび実地監査によって監査を実施します。

5．4　監査の実施期間

定期監査：平成24年7月－平成25年6月　適宜実施

臨時監査：平成24年9月－平成25年1月　重点監査項目毎に実施

会計監査：決算終了後の平成25年6月初旬に実施

5．5　監査報告書の作成

監査報告書の作成は，平成25年6月に行う予定です。

5．6　監査意見のフォローアップと監事監査に対する意見の聴取

（1）マネジメント(理事・機構長)との面談(2回／年)

担当領域の年度方針を聴取する(6月)とともに，監査のフォローアップとして監事意見に対する取組状況を確認します(12月)。

(2)監事監査に対する意見の聴取

定期監査，臨時監査等に関して，監査対象の本部部門長，部局長にアンケート(監査方法，監査内容，監事意見等)により監査報告に対する意見を聴取し，提出された意見を今後の監査に活かしていきます。

5．7　部局訪問

監事監査は，京都大学の業務全般を対象といたしますが，京都大学は17大学院，10学部，14附置研究所，21教育研究施設等，6機構等を数える大きな組織であり，業務は広範囲かつ多岐に亘っていますので，監査を網羅的に実施することはできません。そこで，平成24年度は，監査対象を数部局等に限定し，監査項目については平成24年度の部局行動計画の中から特に重要と考えられる項目を選び，それに関連する業務について監査を行うこととします。

しかし，他方では，監事業務の適正な遂行のため，また監査機能の質を上げるため，さらに以降の監査計画策定のためには，京都大学全体の実情をできるだけ正確に把握することが不可欠です。そこで，できるだけ多くの部局を訪問し，それぞれの部局の業務状況について見聞し，意見交換等をさせていただくことにしています。2年間で全部局を訪問させていただく予定です。

6．監事監査および部局訪問の実施状況

定期監査における業務監査・会計監査(平成23年度)，臨時監査(平成24年度)および部局訪問(第一部)を行ってきました。

平成23年度の業務監査については，5月から6月の間に関係する部門を対象として，「効率化の推進」，「重点分野の強化」，「PDCAサイクルによる業務計画の実施」，「コンプライアンスの推進」，「基本戦略・方針の策定」等に関して，監事監査を実施しました。その結果，平成23年度の業務の執行状況は，京都大学が掲げる理念・中期目標から見て，中期計画，年度計画に沿って，適正かつ効率的な運営が行われていると認められ，計画は順調に実行されていると判断しました。

また，臨時監査については，9月に，4部局等を対象として，「共通教育と専門教育の連関への取組」に関して，監事監査を実施したところです。他の事項については，今後行うこととしています。

部局訪問については，8月から10月に亘って21部局等を訪問し，部局等における運営状況や課題等について意見聴取と意見交換を行ってきました。

運営形態や業務内容が異なる部局等から，様々な意見を聞くことができました。

それらには，先進的な国際研究プロジェクト事業

の事例，国際的研究者ネットワーク拠点の強化事業の事例，先進的・独創的な研究開発事業に取り組んでいる事例，将来構想の策定の事例，省エネへの熱心な取組の事例，教育の質の改善への熱心な取組の事例など，大学の活力を示す大変喜ばしい事例についてのご報告がありました。

しかし，部局等が抱える困難な課題についての意見もありました。多くは，部局に固有の課題です。その中で，特に，喫緊に改善または課題解決が必要と思えたものには以下のものがあります。「教育研究スペースの狭さ」，「図書スペースの狭さ」，「学問的性質から外部資金の獲得が困難な部局における財政的基盤の脆弱さ」，「博士学位取得者の就職の困難さ」，「博士後期課程への進学志望者の減少傾向」，「女性教員採用の困難さ」，「短期間での人事異動に起因する特殊業務の継承･維持･人材育成の困難さ」，「国際化対応のためのスタッフ不足」，「教授・准教授・助教構成比率のアンバランス」などです。

また，本部と部局の連携が求められる課題について，様々な制約のために十分な熟議がされないために意見の食い違いが生じていると思える事項についてのご意見もありました。これらについては，本部と部局が高い目標の達成のために対話を深めていただく必要があると感じました。

他方，６月に，本学元教員による不正経理疑惑が起こったことが契機になり，文部科学省から，「不正経理防止のための体制整備」が求められました。不正経理を防止することはきわめて重要です。監事としても，監査業務を通して，不正防止への対応を強化しなければならないと考えています。

７．むすびに

監査業務の遂行には，業務現場の実情についての正確な把握が不可欠で，このためには，事務の現場，研究や教育の現場，病院の現場等を訪問し，その実状をお教えいただく必要があります。その折には，是非正確な情報提供とそれに関する率直なご意見等をいただきますようお願いします。監事監査が京都大学の発展に繋がり，大学の理念・目的の達成に近づいていけるよう意を尽くしてまいります。引き続き皆様方のご協力とご支援をお願いする次第です。

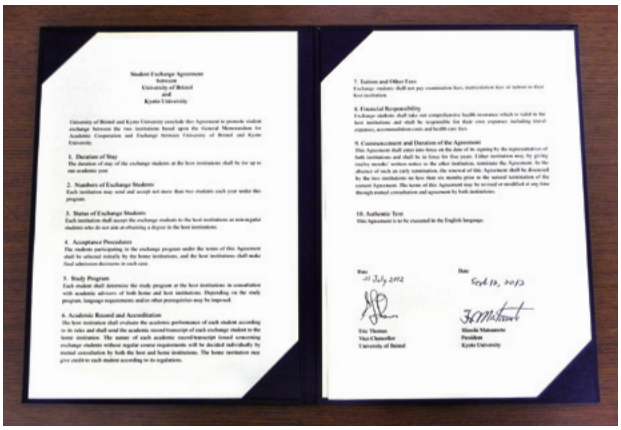
大学の動き

英国ブリストル大学と大学間学生交流協定を締結

英国ブリストル大学と本学との間で，９月12日(水)付けで大学間学生交流協定を締結した。

ブリストル大学は，工学，医学，生命科学から社会科学等の各分野に至るまで，英国トップグレードの大学として高い評価を受けている。ブリストル大学と本学との間では，既に大学間学術交流協定(2011年)，産官学連携協定(2008年)を締結しており，現在，各研究分野において活発な交流を実施している。

今回の締結に伴い，今後，両大学において，学生交流を含めた教育・研究全般にわたる幅広い交流の進展が大いに期待される。



協定書

（研究国際部）

元総長岡本道雄先生お別れの会を挙行

去る７月24日に逝去された京都大学第19代総長岡本道雄先生のお別れの会を，９月17日（月），日独文化研究所との共催で京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて挙行した。

湊　長博医学研究科長が総合司会を務め，塩田浩平理事・副学長から開会挨拶，岡本先生の略歴等の紹介後，参列者全員の黙祷により先生の冥福をお祈りした。

続いて，発起人である松本　紘総長ならびに木村　敏日独文化研究所常務理事より追悼の言葉が述べられた。松本総長は，本学の発展に尽力されたことへの謝意，次の世代が育っていくためには「叱る人」が大切な存在であること，哲学への思索は人や世の中への愛情が起点であることに触れ，懐旧の念を述べられた。また，木村常務理事からは，日独文化研究所理事長と所長を兼ねられ，哲学を中心とした理念で日独文化交流推進に精力的な活動をされていたこと，ドイツ哲学から，哲学全般，宗教への造詣を深めていく姿が紹介された。

弔辞を述べる松本総長

弔辞を述べる
木村日独文化研究所常務理事

次に，井村裕夫元総長ならびに先生の門下生で後任として医学部解剖学講座を担当された水野　昇京都大学名誉教授よりお別れの言葉があった。井村元総長は学生時代からの恩師であることや大学紛争に敢然と立ち向かわれていたことを回想し，常日頃から医師は体だけではなく心を癒すことが大切であると口にされていたこと，人間とは何か，人間にとって何が最も大切かの哲学の問いに挑まれていた思い出を振り返った。

水野名誉教授は，岡本先生が心と脳の関係に深い関心を示し，心とは何か，魂とは何か，人は何のために生まれてくるのかと常に情熱のこもった話をされていたこと，哲学書，宗教書を読破され，親孝行や愛国心を思慮深く探求し，教育や平和について思索を巡らせておられ感銘を受けたことなど，門下生を代表して言葉を贈られた。

最後に遺族を代表し，令嬢の岡本貴子さんからは療養の寸前まで公の場に出かけ，人々と談義を交わし会食を楽しんでおられたことや，家庭での先生の様子，エピソード，父娘の愛情あふれる思い出が語られ，「父の人生に関わっ

謝意を述べる令嬢　岡本貴子さん

岡本先生の遺影と献花する参列者

てくださった全ての方々へ」と深謝された。

この後，参列者による献花が行われ，元総長執務室である迎賓室では遺族からの厚意で，功績と栄誉の証，貴重な愛用品，懐かしい写真や自画像など数多くの品々が展示され，参列者は懐かしさに目を細め，持参したカメラに収める光景もみられた。

当日は台風が接近する中，岡本先生の人徳を伺わせるようなさわやかな秋晴れの天候のもと，先生を愛惜する大変多くの参列者があった。

岡本先生愛用の品々を鑑賞する参列者

（総務部）

2012年「中国・西安交通大学 短期留学プログラム」を実施

「大学間学生交流協定による短期留学プログラム（通称：東アジア超短期留学プログラム）」の平成24年度の第４弾として，中国・西安交通大学の協力を得て，９月９日（日）～９月23日（日）サマースクールを開催した。中国語講座，西安交通大学教員による特別講座，書道や太極拳の体験実習，世界遺産の兵馬俑の見学など，多彩な内容が提供され，中国人学生や現地の人々との交流も行われた。本プログラムは，カリキュラムの開発段階から本学卒業生を含む西安交通大学の全学的な支援を得て実施し，安全面にも十分配慮しながら，無事に終了した。

西安交通大学学生と兵馬俑を見学

西安交通大学学生･教員との交流

今回の留学プログラム開催中に，日中関係の緊張が高まる事態となったが，このような時期にあったからこそ，個人と個人の交流の大切さをより一層感じることができた。また，実際に現地に赴くことで，メディアを通じて間接的に見る中国の姿と，自分の目で見る中国の姿との違いを実感した。参加学生10名は，本プログラムを通して，中国の学生を始め多くの人々に出会い，これからの交流を約束した。今回の経験を発展的に将来に生かすことが期待される。

（国際交流推進機構／研究国際部）

中学生向けゼミ等体験講座「ジュニアキャンパス2012」を開催

9月22日(土)・23日(日)の2日間にわたり，中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として「ジュニアキャンパス2012」を京都市教育委員会との共催により開催した。

今年で8回目を迎えるジュニアキャンパスは毎年好評で，今年度は中学生約330名・保護者等約170名の参加者で賑わった。

初日の午前中は，開講式及びオリエンテーション実施後，「気付きを促す可視化」と題する小山田耕二　高等教育研究開発推進機構教授が，コンピュータによるシミュレーションなど見えないものを見えるようにする最新の可視化技術とその効能について特別講義を実施した。講義途中には，携帯電話を使って参加者からアンケートをとり，その結果を可視化するなど，聴衆参加型の講義となった。

午後からは2日間にわたって，各キャンパスの研究施設や講義室等において，実験，工作，自然観察，天体観測などの体験型のゼミや，テキストをもとに議論するゼミなど，35講座のゼミを開講した。その中には，大学院生等が中心となって企画・運営する若手研究者特別ゼミも開講され，環境や歴史などのテーマで実験等を実施し盛り上がった。昼休みには，昨年に引き続き「大学院生等によるポスターセッション」も実施し，普段，大学でどのような研究を行っているかを中学生に分かりやすく説明するコーナーを設け，多くの中学生で賑わった。また，総合博物館・附属図書館も開放し，2日間を通じて参加者には京都大学の様々な研究に触れる機会が提供された。

ゼミ「光学ー私たちは何を「見て」いるのだろう？ー」

ゼミ「低温物理学ー196℃の世界を楽しもう
：超伝導と磁石の不思議」

大学院生等によるポスターセッション

(学務部)

京都大学春秋講義（平成24年度秋季講義）を開催

京都大学春秋講義は，京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的財産について，広く学内外の人々と共有を図るため，1988（昭和63）年秋から毎年春と秋に開講している公開講座である。

今秋はメインテーマを「危機管理」として，１日目の９月16日（日）に，林　春男 防災研究所教授から「事業継続をめざした危機管理」，岡田知弘 公共政策連携研究部教授から「大災害から暮らしと地域を守るために～３・11～」と題した講義があり，302名の参加があった。

参加者からは「危機管理をシステマティックに実施することを学んだ」，「日頃のマスコミから伝えられるものとは異なる視点での講義であり興味深く聴くことができた」，「自分の会社や地域の自主防災を考えるうえで参考になった」などの感想が寄せられた。

なお，２日目の９月30日（日）に開講を予定していた石原慶一 エネルギー科学研究科教授による「危機に強いエネルギーシステムを考える」，小泉昭夫 医学研究科教授による「福島第一原発事故を経験し，リスク評価の限界を悟る」と題した講義は，台風の接近に伴い中止となった。

会場の様子

（渉外部）

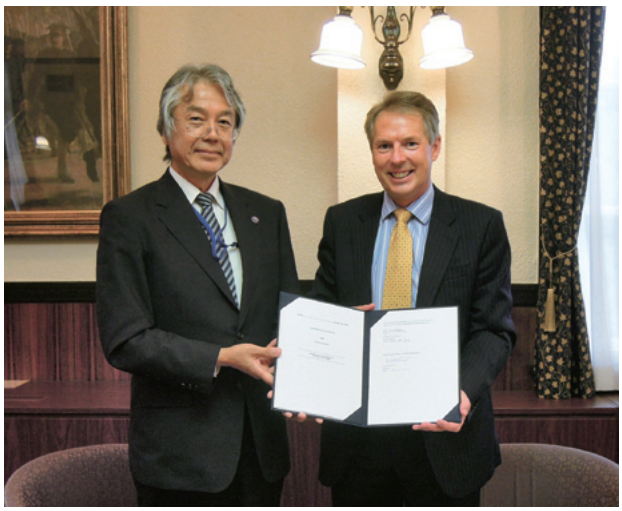
英国サウサンプトン大学と大学間学生交流協定の調印式を挙行

10月18日（木），英国サウサンプトン大学のドン・ナットビーム学長（Vice-Chancellor）一行が京都大学を訪問され，同大学と本学との間で大学間学生交流協定を締結した。

調印式には，総長代理として本学を代表し，赤松明彦 理事・副学長が出席した。

サウサンプトン大学は，1862年に創設された歴史ある大学で，学生数24,000人余りを有する英国を代表する大規模研究型大学の一つである。また，同大学は，工学，医学から法学，経営学，人文科学等に至るまで，幅広い教育・学術の分野で実績のある大学であり，近年は，医学・工学の学際連携研究の分野でも先進的な活動を行っている。

今後，サウサンプトン大学とは大学間学生交流協定による交換留学のほか，スタディーアブロード（私費学生特別枠留学）など，様々な形で本学との学生交流が展開することが期待される。


協定調印後の赤松理事・副学長とナットビーム学長

（研究国際部）

部局の動き

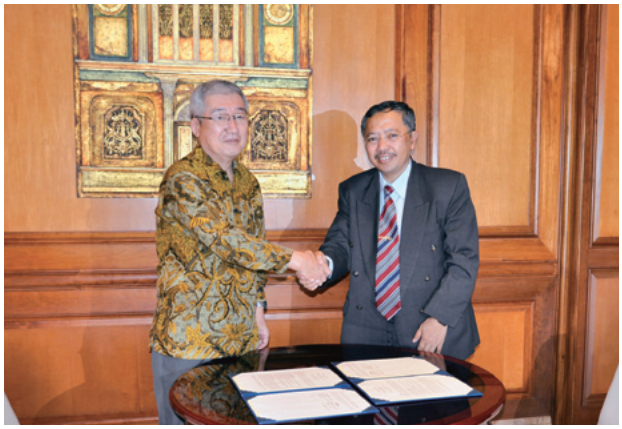
生存圏研究所がインドネシアイスラム大学土木工学・計画学部と部局間学術交流協定を締結

生存圏研究所(Research Institute for Sustainable Humanosphere; RISH)は，9月22日(土)インドネシアイスラム大学土木工学・計画学部(Faculty of Civil Engineering and Planning, Islamic University of Indonesia; UII-CE&P)と部局間学術交流協定を締結した。調印式は，バンドン市内のホテルで行われた。

調印式にはUII-CE&PからMochamad Teguh 学部長をはじめとする4名が，またRISHからは津田敏隆 所長をはじめとする3名が参加した。調印式に先立ち，最初に津田所長からRISHの組織構成と研究概要が説明され，続いてTeguh学部長からUII-CE&Pの概要が説明された後，津田所長とTeguh学部長が協定書に署名した。調印式の後，インドネシア式昼食会を催し，両部局の更なる相互理解の発展と今後の共同研究などに関する話題で交流を深めた。

UII-CE&PとRISHとの交流は，2007年7月にインドネシアのバンドン市で開催された第73回生存圏シンポジウムでの交流がきっかけで始まった。その後，農学研究科森林科学専攻の博士後期課程に，UII-CE&Pの講師がインドネシア政府給費留学生として入学したことによって両部局の絆は深まり，RISHのスタッフがインドネシアで開催される木質科学関連の国際シンポジウム等に参加する機会を利用して，木造伝統建築に関する研究やUII-CE&Pでの特別講義などの実績を積み重ね，このたびの協定締結に至った。

両部局は，今回の交流協定の調印により，さらに強い協力関係を築いていくことになる。新たな共同研究やシンポジウムの実施，人物交流等を通して，学術研究の推進と教育活動の強化を図っていく予定である。



協定書に調印後握手を交わす津田所長(左)と Teguh学部長(右)

調印式後の交流の様子

調印式記念撮影

(生存圏研究所)

先端技術グローバルリーダー養成プログラム第７期生修了式を挙行

９月28日（金）桂キャンパスBクラスター桂ラウンジにて，先端技術グローバルリーダー（GL）養成プログラム第７期生（８名）の修了式を挙行した。

同プログラムは，博士学位取得直後の研究者および博士学位取得間近の学生を研究員またはリサーチ・アシスタントとして雇用し，深い専門性に加えて幅広い識見も備えた国際的な研究リーダーとして活躍する人材を養成することを目指しており，科学技術振興機構の支援を受けて工学研究科と薬学研究科が連携して平成20年度から実施している。養成対象者は半期ごとに募集し，養成期間は１年間である。第７期生は，平成23年10月から同プログラムが提供する双方向教育型共同研究，産官学交流塾，実践英語教育，知的財産教育の各プログラムに取り組み，このたび，晴れて修了を迎えることになった。

修了式は，双方向教育型共同研究および産官学交流塾に協力いただいている連携企業・機関の方々も列席され，和やかに執り行われた。北野正雄 工学研究科長の祝辞，高田耕平 大阪市立工業研究所産学官連携コーディネーターによる来賓挨拶の後，長谷部伸治 GL養成ユニット長より，第７期生に修了証書が授与された。

長谷部ユニット長による修了証書授与

第７期生の挨拶では，「実践英語教育や産官学交流塾での発表を通して，プレゼンテーション力が向上した」，「双方向教育型共同研究や産官学交流塾では，異分野の研究や研究者との交流を持つことができ，視野が広がった」，「英語力の重要性を再認識し，自身の英語力向上の必要性を痛感した」，また「同年代の異分野の研究者と交流できたことで，今後の研究活動に大きな財産を得ることができた」などの同プログラム履修による成果が語られた。

同プログラムについては，京都大学のホームページhttp://www.ugl.kyoto-u.ac.jp/で公開している。

修了式集合写真

（先端技術グローバルリーダー養成ユニット）

グローバル生存学大学院連携プログラム履修者入学式を挙行

平成23年度に文部科学省・日本学術振興会より公募された博士課程リーディングプログラム・複合型領域（安全安心）において，９つの研究科（教育学，経済学，理学，医学，工学，農学，アジア・アフリカ地域研究，情報学，地球環境学）と３つの研究所（生存圏，防災，東南アジア）が協働して提案していた新しい大学院教育システム「グローバル生存学大学院連携プログラム」が採択され，今年度前期の間に実施された予科プログラムの参加者から履修者の選抜が行われた。

この第１回の入学式が，10月２日（火），淡路敏之副学長，前平泰志教育学研究科長，佐藤　亨情報学研究科長，間藤　徹理事補（農学研究科）をはじめ各部局からの教職員の臨席のもと，本部棟において挙行された。

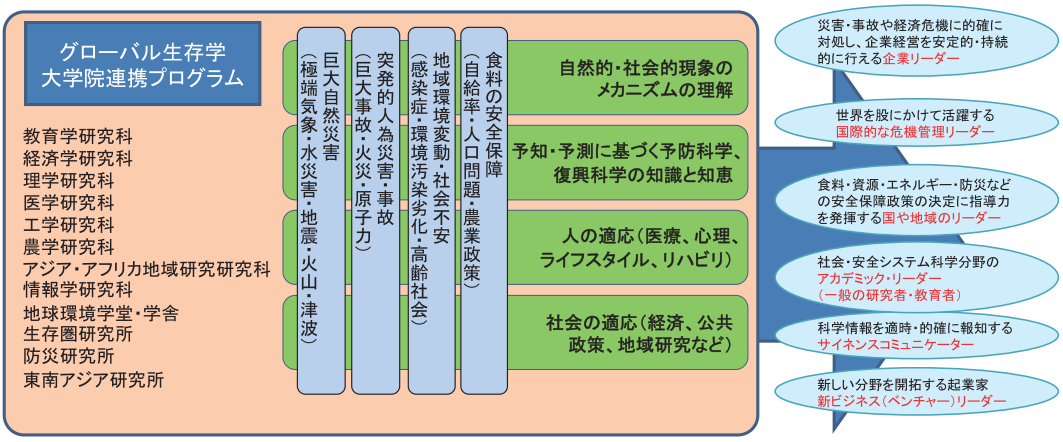
入学式は，木原正博医学研究科教授による開会の辞，入学者の紹介，総長の祝辞（代読）に続いて，入学者代表の宣誓の後，プログラム責任者の淡路敏之理事・副学長及びプログラムコーディネーターの寶　馨防災研究所教授から「履修生歓迎のことば」があり，合格者に合格通知書（日英版）が交付された。

入学者代表の宣誓

今年度の履修者は次のとおりである。

在籍研究科	履修者数
教育学研究科	1
経済学研究科	2
理学研究科	1
医学研究科	3
工学研究科	5
農学研究科	1
アジア・アフリカ地域研究研究科	7
情報学研究科	1
計	21

グローバル生存学大学院連携プログラム



（学際融合教育研究推進センター）

寸言

回想 ―和魂洋才の勧め―

藤井　公一郎

還暦を過ぎて学生時代を振り返ってみると後悔することも多々あるが，中には「あれは良かった」と思うキラリと光る記憶もあるものだ。中学時代で言えばたまたま夜間に煌々とライトアップされた四日市石油コンビナートの夜景を目の当たりにしたこと。未来小説の一シーンを見たような強烈な印象を受け，漠然とではあるが将来石油化学に関わるような仕事がしてみたいと思った。高校時代はスキー部でクロスカントリースキーに没頭したこと，京大に入ってからは海外への漠とした憧れからESSに入部したこと。入学直後は大学紛争の影響で封鎖されている大学には落ち着ける場が無かったが，ESSではコアとなる諸先輩がHome Meetingと称して自分の下宿に10人前後の下級生部員を集め，各々特色のある勉強会を主催していた。私自身も法学部の先輩のHMに入れてもらい，色々な学部の人と知り合うことで視野も広がり，京大という素晴らしい総合大学に在籍したメリットを享受し感謝している。また，ESSのお蔭で在学中に米国に短期遊学する気になり，感受性の高い学生時代に広大な米国をバスで横断，米学生とも同じ寄宿舎で腹を割って話し合えたことは得難い経験となった。こういった経験がMotivationとなり三井物産(株)に就職。米国で通算12年間の駐在生活を送り，また，直近では関係会社の三井石油(株)の社長を５年務めた後，今は極東石油工業(同)の経営をしている。学生時代に温めていた強い好奇心に従って気ままに歩んで来た会社人生だ。

逆に今振り返ってみてやっておけばよかったと思うのは，京大卒業後に例えばハーバードやウォートンの様な超一流MBAスクールで学ぶこと。ITで起業を目指す人ならシリコンバレーに近いスタンフォードかもしれない。何もMBAは万能ではないし，その知識があれば現実の会社経営が出来ると言っているのではない。経営者に最も求められるのは究極的には人間力だということは，私には耳が痛い話ではあるが異論を差し挟む余地は無い。松本総長が仰っているように京大はそういう総合的な人間力を養成する場でもあって欲しいと思う。では何故MBAなのか？世の中が益々グローバル化していく中でCommunicationのToolとして英語の重要性は益々高まっている。英語は所詮“道具”に過ぎず大事なのは“中味”だと言うが，いくら素晴らしい中味でも発信して理解されなければ宝の持ち腐れである。それと同様に，経営を語る時にMBAの基礎知識はグローバル経営には欠かせない共通言語の様なものなのだ。総合商社の業態を例にとると，右から左に物を売買して口銭を稼ぐという時代は終わり，事業投資・経営を通して収益を上げるという業態に変革している。自身が米国三井物産の業務部で在米100社の関係会社を管理する立場になった時，営業部門で自信を持って仕事をして来た自分が，46歳にして経営の視点が必要となり，苦労したのだ。関係会社各社では各々独自の個別事情，業界環境があり，そこで成長戦略を編み出していくのは現場経営者の役割である。これら経営者が自社の経営戦略を株主に納得させるにも，また，逆に株主の立場で事業戦略を評価し疑問点の摺合せをするにもこの共通言語は極めて有用である。日本の多くの企業では経営者は一般社員の中から通常の叩き上げのキャリアパスを経て選ばれるが，欧米では最初から“経営者”という職業の“Specialist”として選ばれる場合が多い。“エンジニア”が技術を熟知していなければならないのと同様に“経営者”は経営術を熟知していなければならない。また，それ以上に重要なのは欧米の超一流のMBAで学べばそこで全世界から集まった優秀な学生との切磋琢磨が生まれるということ。その厳しい競争環境で鍛えられることの有用性を各国のGlobal企業が認知しているからこそ卒業生には活躍の場が潤沢に提供されることにもなるのだ。経営者を目指す学生諸君は内向きの草食系男子・女子を脱して，和魂洋才への回帰を目指してはどうだろう？

（ふじい　きんいちろう　極東石油工業合同会社　社長　昭和48年工学部卒業）

随想

「セレンディピティー」

名誉教授　島田　幹夫

「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人也。」ご存知，「奥の細道」の冒頭の一節である。気取るつもりはないが，なぜか私は，このくだりが好きである。多分，齢70余りを重ねてみると，「人生は闘い」というより，Life is journey！「人生は旅」と思いたくなる心境の変化によるものであろう。昔も今も人は皆，「旅」を楽しんでいる。「旅」には偶然の発見があり，人と人との出会いがある。そこには人知れぬドラマがある。

私事ながら，生まれてこの方，ほぼ23年間は岐阜，その後約40年間は京都，この８年間は福井に在住。その間，留学と研究を含め，米国に３年余り滞在，国際会議などのため，10数か国を訪ねる「旅」を楽しんだ。しかし，本学・生存圏研究所を退職後，某私立大学で教鞭をとることになり，第２の人生にしては慌ただしい日々を送っている。ここでは，苦楽を共にした良き同僚に恵まれ，更に京都大学の学生とは一味違った「多様な学生」との出会いも格別で，終生忘れ得ないものになっている。現在，「学生の面倒見がよい」ということでズブの素人の私が，「FD（ファカルティディヴェロップメント）」委員長に祭り上げられ，学生本位の授業改善など学士課程教育の改革運動に携わっているのだが，教員の意識変革の難しさを痛感している。次いで，FD活動の経験から，新設「キャリアセンター」の任務を背負うことになり，「キャリア教育」の推進に取り組んでいるが，その根本問題を突きつけられることになった。そもそも「学校教育」とは，「生き抜く力を培う人間（キャリア）教育」のはずであった。そう考えると，今になってなぜ，「キャリア教育」なのか，おかしな話で，自分も一教員として忸怩たる思いでいる。しかし，昨今のグローバリゼーションと国際競争の激化から来る産業社会の要請とは裏腹に，今どきの学生は「キャリア」意識が希薄であり，やはり大きな問題である。それに伴って，企業と学生のミスマッチングを避けるための就職指導・キャリアガイダンスの在り方と私立大学の宿命ともいえる経営上の問題をも実感することになった。「キャリア： career」とはラテン語の「轍」に由来する。その現代的定義は難しいが，「人生における過去・現在・未来のあらゆる経験の累積」とすれば，これはまさに「ラーニングキャリア」から「ワークキャリア」へ，さらに「ライフキャリア」へと繋がる，人の生涯そのものである。学生には，「大学は人と人との出会いの場，偶然のきっかけを活かし，未来の学びに繋げよう！」とエールを送っている。また，日本人の相次ぐノーベル賞受賞のマスコミ報道の故か，「科学技術における偶然的発見とそれを活かす能力」すなわち「セレンディピティー」が，今や「キャリア教育界」でも人口に膾炙されるようになった。そこで，理工系の学生には，「セレンディピティー」とは，人生の「一期一会」にも通じる概念であることを言って聞かせているこの頃である。

思うに，人生の醍醐味は偶然の発見と未知なる経験を楽しむことにあるのではなかろうか。来年迎える第３の人生では，「片雲の風に誘われて」，足の向くまま気の向くままの「旅」ができたら幸いである。

（しまだ　みきお　平成17年退職　元生存圏研究所教授，専門は木質生化学）

洛書

CiRA（サイラ）と白眉

齊藤　博英

この秋，iPS細胞研究所（CiRA）の玄関には，山中伸弥所長に贈られた多くの美しい胡蝶蘭が所狭しと飾られている。日本人による25年ぶりのノーベル生理学・医学賞受賞の瞬間を，私は研究所の仲間と共に間近に見ることができ，大変な幸運を感じている。そして今，多くの期待と責任感を感じながらも研究所は活気に満ちている。研究室間の垣根が取り払われたオープンラボでは，ディスカションが日々行われており，その活気を肌で感じることができる。主任研究者としてCiRA内に自分の研究室を立ち上げてから約一年，周りの先生やスタッフの方々に助けられながら，非常に充実した環境で研究を進めている。

私が専門とするシンセティック・バイオロジーという分野は，生体分子や生命システムを「創る」ことで生命を理解し，同時に新しい技術を生み出そうとする分野である。21世紀になり，生命の設計図とも言えるDNAの配列解析が飛躍的に進んだ。しかしながら現在，机の上に積み上げられた膨大な量の設計図を前に，研究者は頬杖をついて思案している状況とも言える。そこから有益な情報を取り出し，望みの生命システムや細胞を創ることができれば，生命科学は大きく進展すると考えられる。たとえば，山中所長らの研究は，わずかな遺伝子で細胞を初期化できることを示し，これまでの細胞に対する人々の概念を大きく変えた。今後，細胞の初期化や分化制御の仕組みの解明を通じて，生命システム構築原理の理解は飛躍的に進むだろう。技術としての応用も大きな可能性が広がっている。私も，生命の理解につながる真に役立つ技術の開発を目指し，日々こつこつと研究に取り組んでいきたい。

私は，CiRAと同時に白眉プロジェクトにも属している。この白眉制度は松本紘総長の熱い思いで約３年前に始まり，分野を問わず毎年最大20名を最長５年間雇用し，研究に「ひたすら」専念できる環境を提供するという非常にありがたいものだ。５年の間に次のポジションを探さねばならないというプレッシャーはあるが，第一期の白眉研究者として幸運にも採用いただいた私の感想は「面白い」の一言に尽きる。当初は，あまりにも研究分野が異なる人々が集まる組織のため，あまり深い交流は難しいのではと考えていた。しかし，その予想は見事に裏切られた。月に１－２回催されるセミナーや懇親会，皆で夜通し語り合う研究合宿，卒業生を交えて集う「白眉の日」，それらで繰り広げられる議論がとても刺激的なのだ。たとえば，数学の研究者は，整数論で今なにが問題なのかをひたすら数式を板書しながら説明してくれた。もちろん専門箇所では理解に及ばないことも多いが，情熱がひしひしと伝わってきた。そのプレゼンの最中に全くバックグランドの異なる研究者が質問すると，議論が白熱し大変面白い。他にも古典インド哲学の写本伝承の問題に対して進化生物学の系統分析の理論で解決できないかといった提案や，天文学，情報科学，分子生物学を専門とする研究者が生命起源のモデルを論じあうなど，例をあげれば枚挙にいとまがない。学問としての背景が異なれば問題の捉え方，切り込み方が大きく異なり，驚かされる質問に度々出会う。「白眉プロジェクトは知の融合を目指す壮大な実験場」と聞いたことがあるが，すでに何人かの白眉研究者間で共同研究が進行している。新たな展開が生まれるのではと，今から結果を心待ちにしている。

また，白眉メンバーはなぜか酒好きがとても多い。皆で杯を酌み交わし，様々な議論が夜更けまで繰り広げられる光景がよく見られる。「レトロな京都大学の匂いを感じる」とおっしゃった先生もいた。私は当時の匂いを直接知らないが，酒を飲みつつ膝を突き合わせ議論する楽しさかと，勝手に解釈している。生涯にわたる財産となるにちがいない，様々な分野の研究者との交流の機会を与えて下さった京都大学に心から感謝するとともに，この刺激的な研究環境をぜひ継続していただきたいと切に願う。

（さいとう　ひろひで　白眉センター特定准教授（白眉プロジェクト受入部局はiPS細胞研究所），専門はシンセティックバイオロジー，バイオエンジニアリング）

話題

APRU 大学博物館研究シンポジウムを開催

「大学博物館研究シンポジウム－先端研究の核心としての大学博物館コレクションネットワークの構築－」を環太平洋大学協会(The Association of Pacific Rim Universities : APRU)と共催で，9月12日(水)～14日(金)の間，百周年時計台記念館および総合博物館において開催した。APRUは，環太平洋地域の社会の重要課題に，教育・研究の分野から協力・貢献することを目的として1997年に設立され，16か国(地域)42大学が加盟している。

総合博物館では，かねてから日本学術振興会(JSPS)アジア・アフリカ研究基盤形成事業(2011～2013年)に採択された「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」事業等で，標本コレクションを基盤とする国際的研究・教育ネットワーク構築を進めてきた。本シンポジウムはこれらの実績の上に開催したもので，森　純一 国際交流推進機構長・副理事を組織委員長とし，京都大学教育研究振興財団からの助成を受け，総合博物館が主に担当した。

シンポジウムには，APRU加盟大学を中心に13カ国より100名が参加し，口頭発表，ポスターセッション，ワークショップが3日に亘って行われ，厳しいスケジュールにもかかわらず緊張感が途切れることなく，活発な経験・意見の交換が行われた。また，本学総合博物館の常設・特別展および文系・理系の収蔵庫の見学ツアーも行われた。質・量的に優れた標本類が，温度や湿度が管理された収蔵庫に整然と収められている様子を紹介できたのは，誇らしい出来事であった。

本シンポジウムでは，大学博物館の標本は，急速に研究・教育への利活用頻度が高まりつつあり，活用分野も，従来の博物科学の分野はもちろん，バイオテクノロジー，地球環境の復元・予測，維持可能な天然資源利用など工学から社会科学まで広い最先端研究分野に拡がりつつあることが報告された。

また，これらの標本の利活用を円滑にするためのデータベース化，さらには標本を基に行われた研究の背景を記した著名研究者のフィールドノートなどを広くアーカイブ化することの重要性が討議された。さらに，展示を博物館から市中に持ち出す大胆な試み，あるいは，展示考古学発掘を通じた多様な民族・文化の相互理解の橋渡しなど，従来の「アウトリーチ」の枠を超えた大学博物館ならではの地域・国際社会への貢献の事例も報告された。

総合博物館考古学収蔵庫見学ツアー

このように，大学の研究・教育・社会貢献において標本はますます重要な役割を果たすことが，多くの大学に認識され始めている。このことを，既に膨大な標本を擁する大学博物館だけでなく，これから標本を収集・整備しようと意気込んでいる大学からも本シンポジウムに多くの参加者があった事実が裏付けている。

本シンポジウムの最大の成果は，今後益々利用価値が高まっていく標本について，個別の大学間での充実競争ではなく，国際ネットワーク化を図り大学や大学博物館が密接に協力することで，これら標本コレクション群を大学での研究・教育はもちろん，大学の国際社会への貢献の推進に役立てるべきであるとの合意を得られたことである。また，このネットワークを実現するためにシンポジウムを定期的に開催して課題の検討を行う必要があることが決議され，APRU本部への働きかけを行うことも決められた。さらに2年後の開催を目指して，複数のAPRU加盟大学博物館が開催候補地としての検討に入っている。

今回のAPRU大学博物館研究シンポジウムは，このように大学や大学博物館の未来に指針を与える具体的提言やアクションを生み出した有意義なものとなった。

(研究国際部)

学術情報メディアセンター創立10周年記念シンポジウムを開催

学術情報メディアセンターは，10月12日(金)，百周年時計台記念館において，学術情報メディアセンター創立10周年記念シンポジウムを開催した。このシンポジウムは，センター設立から10年という節目に際して，「これまでの10年，現在，未来」をテーマとし，センターの活動を紹介することを目的としたものである。また，センターの外部評価の一環とし，学外から外部評価委員３名を招き，講評していただいた。

第１部では，「学術情報メディアセンター及び情報環境機構設立の理念とその役割」と題し，初代センター長および初代機構長である松山隆司 情報学研究科教授が，センターおよび機構設立の理念について講演した。その後，中島　浩 センター長および美濃導彦 機構長が，それぞれセンター，機構の役割について紹介した。

講演する中島センター長

続く第２部では，「各研究室のこれまでの歩み，現況，今後」と題し，センターの専任教授８名が各研究室の活動および情報環境機構の業務への関わりについての講演を行った。また，機構を代表して，永井靖浩教授より機構の活動紹介を行った。第２部の最後には，中島センター長がセンターの将来ビジョンについて講演した。

第３部では，外部評価委員である西尾章治郎 大阪大学教授，髙井昌彰 北海道大学教授，佐藤三久 筑波大学教授より，講評をいただいた。「業務と研究・教育のバランスをうまくとっている」，「研究の幅が広く，教員の層が厚い」といった肯定的な評価をいただいた一方，「業務と研究の両面を担っているセンターの学内での位置づけを明確にする必要がある」，「業務に時間を費やすセンター教員のキャリアパスを確立する必要がある」などの課題が挙げられた。これらは，他大学の情報基盤系センターも同様に抱える問題であり，これらの問題点を共有できたことも大きな成果の一つである。シンポジウムには153名の出席があり，盛況であった。

外部評価委員による講評

シンポジウム終了後，交流会を開催した。はじめに金澤正憲 名誉教授より挨拶があり，続いて西尾大阪大学教授の発声により乾杯した。和やかな雰囲気の中交流会は進み，こちらも盛況のうちに終了した。交流会への出席者は51名であった。

交流会の様子

（学術情報メディアセンター）

京都大学防災研究所公開講座を開催

防災研究所は，９月20日（木）キャンパスプラザ京都において第23回京都大学防災研究所公開講座を開催した。

甚大な被害をもたらした東日本大震災から約１年半，「巨大災害にどう立ち向かうか－東の復興・西の備え－」と題し，直接的な被害を受けた被災地の復興，また，近い将来発生が予想され，大きな被害をもたらすと懸念されている南海トラフの巨大地震・津波などを中心に，これまで現地を訪れ研究を重ねてきた最新の研究成果についてわかりやすく紹介した。

当日は，中島正愛 所長の挨拶のあと，澁谷拓郎教授による「東北地方太平洋沖地震の教訓を来るべき南海トラフ巨大地震の予測に活かす」，田中仁史教授による「東日本大震災復興計画と来るべき西日本大震災対策」が，午後からは，千木良雅弘 教授「深層崩壊の実際と予測－特に2011年台風12号によるものを中心として－」，中川　一 教授「天然ダムの話－安定性の評価と決壊時の洪水規模予測－」，畑山満則 准教授による「情報通信技術の高度化と災害対応への応用－新たな可能性と実現のための課題－」の五つの講演を行った。

最後に行った「総合討論」では，将来予想される西日本での地震に対する活発な質問が寄せられ，講演者が回答した。会場は終始熱気に包まれ，一般市民，技術者，自治体職員等約170名の参加者は，最後まで熱心に聴講した。

（防災研究所）

訃報

このたび，佐藤（さとう）　進（すすむ）名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同名誉教授の略歴，業績等を紹介します。

佐藤　　進　名誉教授

佐藤　進先生は，９月10日逝去された。享年81。

先生は，昭和29年京都大学工学部鉱山学科を卒業後，同年４月同大学大学院工学研究科鉱山学専攻に進学，同34年３月同博士課程を終え，同年４月京都大学工学部助手，助教授を経て同51年教授に就任，精密工学専攻振動工学講座を担任された。この間，同35年９月には京都大学工学博士の学位を授与された。平成６年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，平成６年４月から同９年11月まで学校法人金蘭会学園理事長を務められた。

先生は振動工学に関する研究において優れた研究業績を残され，その発展に寄与された。また，社会科学の分野においても，原子力発電の危険性について警鐘を鳴らし続けるなど多大の貢献をされた。主な著書に『科学技術とは何か』，『価値の選択』等がある。

（大学院工学研究科）

ご意見・ご感想をお寄せください。
京都大学渉外部広報・社会連携推進室　〒606-8501　京都市左京区吉田本町　E-mail：kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp